歴史と文化が色濃く残るまち
明和町

明和町には、伊勢神宮に仕える斎王が住まわれていた斎宮がありました。斎宮は発掘された規模や出土品から、天武王朝時代のおよそ七世紀末ごろから、中世にいたるまでの間、県南部の産業・文化の中心地であったことがうかがえます。実際、町内からは数多くの遺跡や古墳が発見され、この地の歴史が大変古いものであったことを物語っています。

奈良時代以降、この地域は伊勢神宮の神宮領に属していたため多くの御園が置かれ、江戸時代には藤堂藩・鳥羽藩・紀州藩・神宮領と多くの藩に分割して統治されていました。また、町の南部を通る伊勢街道は、当時お伊勢参りの人々で賑わい、宿場町・伊勢平野の中心穀倉地帯として栄えました。

明治22年には、市町村制施行により大淀村・下御糸村・上御糸村・斎宮村・明星村が成立。昭和30年、大淀町・下御糸村・上御糸村の3つの町村が合併して「三和町」に、斎宮村と明星村が合併して「斎明村」となりました。そして昭和33年、これらの2町村が合併し、各町村から1字ずつをとって「明和町」と名づけられました。

町章とシンボル

町の木「槇」

古くから明和町で多く育てられており、常緑にして生命力が強いとされている。防火・防風のための生け垣や庭園樹として広く利用され、愛されている。（昭和 54 年 7 月 20 日制定）

町の花「ノハナショウブ」

現在栽培されているハナショウブの原種で、紫色の清楚な花が毎年 6 月上旬頃に開花します。通称「どんど花」と呼ばれ、古来「斎宮」の名花として知られている。（昭和 63 年 6 月 17 日制定）

町章

明和の頭文字の「明」を解体して日と月で表し、日は「威厳」、月は「慈愛」を意味し、天体のごとく丸く高く発展と向上を表している。（昭和 35 年 8 月 26 日制定）

位置と交通

三重県のほぼ中央部にある伊勢平野の南部に位置し、東は伊勢市、西は松阪市、南は玉城町・多気町に接し、北は伊勢湾に接しています。

地形は平野が多く、大堀川、笹笛川、祓川の３つの川が伊勢湾へと流れ込み、良質米の生産地域となっています。

気候は、冬暖かく夏涼しい東海型気候に属し、全般的に温暖で、四季の変化は快適な風土を生み出しています。

交通面では、まちの中央部を近畿日本鉄道が横切り、明星・斎宮の２つの駅は、通勤・通学などに利用されています。また、国道 23 号と県道鳥羽松阪線がほぼ東西に走り、これらは南北に走る主要な町道とともに、交通ネットワークを形成しています。